

樋爪氏の祖は、藤原清衡の四男清綱であるといわれています。清綱は祖父に当たる藤原経清と同じ宮城の亘理郡を拠点とし、「亘理権十郎」を名乗っていましたが、長男・俊衡が志波郡を治めることになり、姓を樋爪氏に変えたといわれています。

—紫波町まち旅図鑑 紫波町・紫波町観光交流協会発行から—

《《《 12～1月行事予定のお知らせ 》》》

12月1日 (日曜日)	第11回定期講演会	午後2時から4時まで 赤石公民館 演題 「赤石の古代～中世(仮題)」 講師 丸山浩治氏 (岩手県立博物館専門学芸員) 参加料 500円 (会員は資料代のみ) 参加申込み FAX 676-3999 (赤石公民館)へ
12月18日 (水曜日)	第47回月例懇話会	午後7時から午後9時まで 赤石公民館 発表者: 平井和夫 テーマ: 「防御性集落について」 発表者: 高橋敬明 テーマ: 「比爪館1～5次発掘調査の概要」
1月15日 (水曜日)	第48回月例懇話会	午後7時から午後9時まで 赤石公民館 発表者: 堀切奎三 テーマ: 「紫波町の金山と樋爪館について(二)」 発表者: テーマ: 「

とても有意義で楽しい一日でした ----- 会員現地研修旅行無事終了 -----

11月3日の早朝7時に赤石公民館を出発したバスは、東北自動車道を一気に北進し鹿角八幡平ICに着きました。ここから先は、泰衡の逃亡を実感させられる山深い道をたどるコースでした。大葛金山を経て途中の「日詰」のバス停に驚いたり、紫波と同じ地名の多いことに興味をひかれたりしながら、最初の研修場所、独鈷・大日神社に到着。若い宮司さんのお話を拝聴し、神様になった仏像などの質疑で参加者一同大いに盛り上がりました。

贅の柵跡や矢立廃寺跡は、時間の関係で車内からの解説とし、大館郷土博物館に向かいました。廃校舎を利用したとは思えない内装と素晴らしい展示方法や、当方の時間に合わせてくれた学芸員さんの適切な解説に関心しながら、大館の歴史を学ぶことができました。

道の駅「たかのす」で比内鳥井を味わったのち最後の研修地へとバスを進め、国道7号～秋田高速道を通り最北の古代城柵官衙遺跡「史跡・秋田城跡」に予定どおり着きました。

胆沢城・志波城よりも前に出羽国の国府として置かれ、渤海使を迎え入れた秋田城の壮大な景観に思いをめぐらし遺跡の規模を体感。正に百聞は一見に如かずでした。更に、発掘調査の成果をもとに大規模な復元整備が計画的に続けられている様子に感嘆し、あらためて遺跡保存のあり方を考えさせられる思いがしました。

ボランティアガイドの方の熱心な案内で見学終了時刻を大幅にオーバーしましたが、帰路を高速道・北上ジャンクション経由に変更し、定刻の18時30分に全員無事帰着できました。強行日程で心配しましたが、事故もなく有意義で楽しい研修になったと思います。

二度も下見をし、コース案内と解説を担当してくれた石幡さん、ありがとうございました。

【第6次発掘調査】

比爪館遺跡跡第六次発掘調査報告書<紫波町教育委員会調査報告書第11集(昭和58年3月発行)から
—一部抜粋—

《第6次調査経過》

調査は遺跡内を通る町道箱清水線の改良拡幅舗装工事に伴うもの。

工事開始予定は昭和57年7月だったが、7月1日に岩手県立博物館の高橋信雄氏が現地を訪れ、同氏立ち合いのもとに重機を使用し拡幅部分の表土除去作業を行い、遺構の存在を確認。

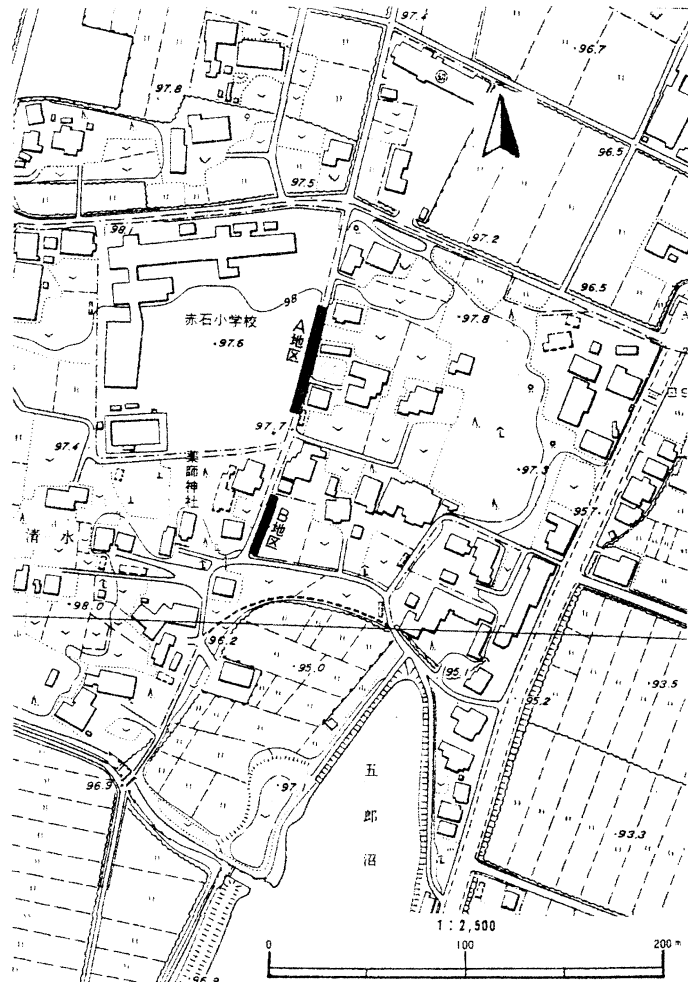
その後、岩手県文化課の菊池郁夫氏が現地を訪れ、町の文化財調査員らとの協議の結果、発掘調査の実施を決定した。

これを受けて紫波町教育委員会は、県文化課・県立博物館の指導のもとに協議を重ね発掘調査を実施するとし体制づくりを行った。

若干の経緯はあったが、調査は7月12日にB地区から始め、A地区はう回路を設定し、現道部分の表土除去作業と樹木の移動作業に移った。

調査は、8月12日までに井戸跡を除き終了し、盆明けの17日からは井戸跡に集中し9月7日に終了。

調査員 鎌田祐二
(紫波町教育委員会文化財調査員)
調査補助員 松丸裕之
(岩手大学人文社会科学部学生)



第2図 比爪館遺跡調査区位置図 (1:2500)

《まとめ》

1 検出遺構

A地区の検出遺構は、竪穴状遺構、土壇、井戸跡、溝状遺構など。B地区は、ほとんどの遺構が調査区の関係上、中途な検出であり今後の周辺部の調査によらなければならない。

【井戸跡】A地区のほぼ中央に位置する。二段掘りの構造で、井戸枠は隅柱をたて各辺に枠板を配し、更に横丸太を構築している。

井戸枠検出部に近い埋土から13世紀後半から14世紀代の年代観を持つ青磁が検出されたことから、少なくとも廃棄年代は14世紀以前となる。次に、井戸枠を設置する際の掘り方的人為的堆積層からは、いわゆる素焼きのかわらけのような土器細片が少量ながら検出されており、現在の編年観では12世紀後半以降に位置づけられる。以上の2点かから井戸の使用年代は、12世紀後半から14世紀以前の年代幅で把握される。

【溝状遺構】A地区に7条検出したが、過去5回実施された調査に結びつくと考えられるものはない。今後の周辺地区の調査により解明しなければならない。

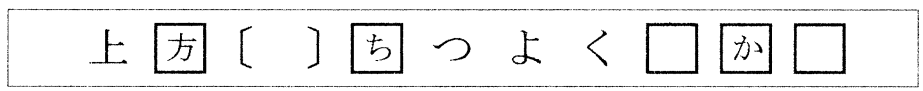
2 検出遺物

検出した遺物には、土器、陶磁器、鉄製品、鉄滓などの他、井戸跡からの仮名混じり木簡や井戸枠などの木質遺物がある。すべてA地区からのもので、B地区からの遺物はない。

◎井戸跡から出土した主な遺物

【陶磁器類】陶器(11世紀前半)、白磁(12世紀代)、青磁(13世紀後半～14世紀代・16世紀代)

【仮名混じりの木簡】



※ 井戸枠内の中上部埋土から検出。長さ約20cm。両面に墨痕が認められたが、もう一面は判読不能。